

夜ふけに草をしめらせた露が……

●詩人
新川和江

(しんかわ・かずえ)

旅

先の宿で、朝食に甘塩の鮭の切身がついてきたりすると、きまって思い出す詩が私にはある。昭和二十年代に読んだか聞いたかした児童の詩で、原型はすっかり忘れてしまっているのだけれども、その詩にこめられたいじらしいねがいが蘇って、かすかな痛みを私の胸中に走らすのである。

戦後はいずこも貧しかったが、乏しい家計をやりくりするお母さんが、時たま夕食の膳にのせてくれる半切れのシャケ。兄弟が多いので、半切れでもせいぎりの贅沢なのだとわかつていても、子どもにはそれが、なんともせつない、なさけない。早く大人になって、自分で稼いで、ひと切れ全部、シャケを食べてみたい——という内容の詩であった。

こんな些細な事柄が、〈ねがい〉となり得た時代の子どもたちは、あれも食べよこれも食べよと、さまざまなお菜を押しつけられて、拒絶反応を起こしかねない近頃の子どもたちよりも、考え様によっては仕合わせかも知れない。欠如があつて、はじめてそれを満たさうとする願望が生じるのだから。

地震がきても雷様が鳴つても離すものか、というつきつめた表情で、ケイタイにしがみついている若い娘を、路上でも電車の中でも、よく見かける。おおかた、カレシと通信をし合っているのだろう。声を聞きたいと思えばすぐ声が聞け、会いたいと思えばすぐ会うことができる状態からは、〈恋〉は生じない。だから恋人ではなくて、無アクセントで発音されるカレシなのだろう。恋のせつなさも歓びも味わうことのできない当世の若い男女が、かわいそうに思えてくる。

私も若い頃には、いくつかの願望を持つには持ったが、棚ボタ式に成就する他力本願的なねがいは、持たなかったような気がする。夢みがちな小娘であつた反面、シャケの詩を書いた児童と同じく現実的で、〈ねがい〉と〈努力〉は同義語、自分の手でかち取るものと解釈していた。

長年詩に携わつてきた私に、今尚ねがいがあるとすれば、それは、表現の道具である〈ことば〉に、託した思いと等量の力が具わつ

【巻頭エッセイ】

てくれること。ことばにもし兵器よりも強い力があつたら、これまでも、多くの人々を不幸におとし入れる戦争なんか、避けられていた筈なのだ。

そんな大問題は措くとして、せめて私の詩を、どこかで読んでくださっている一人か二人のひとの、心に確実に届くよう、ことばをしなやかに詩の次元へと羽ばたかせることはできないものか。
こんな詩を書いたことがあつた。

ことばはいつ 詩となるのであらう

猿に噛みくだかれた木の実が

むろの中で年月を経て酒となるやうに

夜ふけに草をしめらせた露が

あけがた葉末で玉となるやうに

へねがい〜というより、それはもう、へいのり〜に近いものなのかも知れないが。



●新川和江（詩人）

1929年 東京生まれ。

作品集に、『はたはたと夏がめくれ……』（花神社）、『わたしを束ねないで』（童話屋）、『新川和江詩集』『続新川和江詩集』（ともに思潮社）などがある。1983年、詩人の故吉原幸子さんとともに、女性のための初の詩誌「現代詩ラメール」を創刊。1993年終刊まで、女性詩人の発掘に力を注いだ。